

八 放下著、放下著

「石橋も叩いて渡れ」と云ふが馬鹿な取越苦勞はせぬがよい。黒氏梵志と云ふ天竺の外道が、人生宗教上の問題に疑を生じ、死生の大事を明めることに苦しみ、梧桐の華を兩手に持つて、お釋迦様に差上げ、疑團を解いて貰ふため御前に参りました。お釋迦様は梵志の來るを御覽になつて「放下著」と仰せられた。梵志は花を放下せよとの仰せと心得て、左手の花を捨てると、また「放下著」と云はれた。よつて右手の花をも捨てる、またも「放下著」と申されました。梵志は妙に思つて「兩頭共に捨つ、這の何をか放下せん」もはやりやうほう。最早兩方の花を捨てましたのに、何を放下するのでありますかと問ふ。言下にお釋迦様は「中間底を放下せよ」兩頭は放下しても中間に何か一物ある。その一物を放下せよと、嚴しい一喝に、梵志は頓に證悟して、平生の疑團一時に解け、安心を得たと傳へられます。

私共の胸中に何か一物があると、常に穩かなるを得ませぬ。我胸中恐あらば恐る底の者を放下し、惑あらば惑ふ底の者を放下し、疑あらば疑ふ底の者を放下し去れ。捨つるは捨ふ所以である。一切を捨離し放下して、如來の大悲に仰げ「疑があるかと胸を眺むれば、代りに來たぞ念佛の聲」

神田は柳原邊の大道易者。近來は餘程に世が不景氣になつたと云ふものか。とんとお客が少い。特に今日は朝來一人の客もなく、これでは夕餉の料も得難い。さて如何したものであらうぞと、八卦をくる代りに腕組んで、不圖思ひ付いたは、當時劍術の道場にては、試合に來りし修行者には、勝つても負けても飯を食はして、何程かの草鞋錢をくれるとのこと。これは妙だ、好い事に氣付いた、我れ一つ修行者となつて道場に赴かん、負けるの位はいと易いこと、一つ打たれさへすれば夕餉の心配はないと、合點の膝ぼんと打つて

出かけたのが、將軍の指南番柳生但馬守の道場。同じ打たれるならと覺悟定めて、「先生と試合いたしたし、弟子は御免蒙る」とやつたので、道場では、さては名ある劍術者よと、此由を但馬守に通ずる。但馬守も俺に試合を申込むとは餘程腕利であらうと、出で、一禮するに、別段武藝者らしい所もない。變だとは思つたが、用意して木刀おつとり立ち上つた。こちらは易者先生、試合は愚か、これまで竹刀一本持つたことはない、どんなに構へて好いか、そんな事には頓着なく、矢鱈に竹刀を振廻す。此の棒は、筮竹を繰るより數は少いが、ちつと重いわい。こんな物を三日も食はぬ飢腹へ、持たせられて堪るものかと思ふ。但馬守木刀に力を入れて立向つたものゝ、相手は全くの隙だらけ、「サア打て」と掛聲したる易者先生の態度は、何處に變化の手あるやと、己が腕に覺多のあるだけ、力負けて容易に手を下さぬ。此方は打たれさへすればよいと、「ヤア」と掛聲する。但馬は益々驚いて手の下さんやうもない。一足二足あとへよると、此方は「ヤア」と進む。これは餘程偉い人であらうと、流石の但馬守も戰氣立つて木刀投棄て、「驚き入つたる貴殿の御腕前、抑も何流を御修行ありし」と平伏して伺へば、先生驚いて顔赤らめながら、事の次第を物語る。但馬守は默然として、我修行の足らざるを啣ち、「劍は心にあり、彼は打たるゝと心を定めて勝敗に念なし、此の念なきが故に我が術も施し與はざりしか」と云つたとのこと。

彼は雜念あるが故に負け、此は雜念なきが故に勝つ。雜念ほど人を惑はし損ふものはない。御教化には、「雜行雜修自力の心を振り捨て」よとある。この振り捨てた處が、一心に彌陀の憑まれた處であり、憑まれた處が捨てた處であります。とても地獄は一定住家ぞかし」となつた處に「彌陀に助けられ参らすべしと信ずる外に、別の仔細なき」身となられる。放下着放下着、一切を

捨^すて、^{によらい}如來の^{みこゑ}御聲に向^{むか}へ。「^{しんしやうねん}一心正念にして^{たゞち}直に^{きた}來れ」^{なん}何の^{うたがひ}疑や^{おもんばかり}慮の^{えう}要
があらうぞ。